

戸定会会報

〈千葉大学大学院園芸学研究科・園芸学部〉

CONTENTS

特集 徳川家と千葉大学園芸学部との歴史的関係	2
特集 ご存じでしたか 我らが同窓生探訪	4
大学改革	5
会長ご挨拶	6
研究院長ご挨拶	6
退職のご挨拶	7
新任のご挨拶	9
学科近況	11
コロナウイルスと戦った一年	14
支部だより	15
令和3年度 戸定会役員	16
令和3年度 戸定会理事会総会報告	17
会計報告	18
会員計報	19
戸定会名簿の発行について	20
卒業生だより	21
令和2年度 戸定学術振興委員会事業報告	22
国際交流	23
令和2年度戸定会寄付者芳名録	24
浩気寮について	25
アカデミック・リンク松戸「緑のテラス」と「雨庭」	26
アカデミック・リンク松戸の完成を記念して	27
園芸学部あれ！これ！（その6）	28
戸定会より寄付のお願い	28
編集後記	28

2021



特集 徳川家と千葉大学

NHK「青天を衝け」の時代考証を担当されている齊藤洋一氏は本学に隣接する松戸市戸定歴史館名誉

松戸キャンパス内に徳川家の土地はどの位あったのか

松戸市戸定歴史館名誉館長 齊藤 洋 一

現在、私たちが戸定が丘と呼んでいる高台上には千葉大学松戸キャンパスと戸定が丘歴史公園が隣接している。歴史公園は約2,3haだが、近年松戸市は福島県学生寮跡地約2,500㎡と大和銀行社員寮跡地約5,000㎡を取得して、計約3haの土地を一体的に管理をしている。歴史公園の中核をなすのは言うまでもなく戸定邸であるが、これら3haの土地はかつては徳川家の土地であった。

徳川昭武（1853－1910）は、明治15年3月25日の時点で戸定邸の建設を進めており、建物の座敷開きは17年4月7日、その後、庭園作庭工事を行い、20年4月25日には現在私たちが書院造庭園と呼んでいる庭園を南に25間（45m）広げ、東屋庭園の整備を始めている。この後、23年11月には「三角畑」と「戸定邸日誌」に記載される土地を取得して、庭園に組み込んでいる。

建物、庭園を作るには土地の取得が必要である。先述の15年3月25日の徳川昭武の日記には松戸の「処有地」という言葉が見え、同年5月6日条には「松戸処有地中諸処へ、桧・杉・松苗等数百本植付候事」とあるので、この時点で相当程度の土地を取得していたのだろう。

では、徳川昭武は戸定邸を建設するためにどれ程の土地を松戸に取得していたのだろうか。この手掛かりになるのが「明治二十六年調 松戸御所有地反別帳」（以下、「反別帳」と略記。松戸徳川家伝来、戸定歴史館蔵）である。

この史料は明治26年に書き始められ、土地の管理に使われた。いつまで使われていたのかは不明であるが、大正期以降は別の土地管理書類があるので、概ね明治時代と考えて大きな間違いはないだろう。

中身は番号（地番）、字名、地目、反別（地積）、地価、地租、摘要の7項目が一筆毎に縦表形式で記される。地目は田、畑、宅地、山林の4区分で、各地目の一筆毎のデー

表1 地目別面積

地目	町	反	畝	歩	面積（㎡）
田		1		13	1,032.9
畑	2	9	7	17	29,459.1
宅地		8	1	3	8,028.9
山林	3	2	3	7	32,000.1
合計					70,521.0

タが記載される。各地目の最後には面積を集計した書き込みがある。これを整理したものが表1である（1坪3.3㎡として換算）。これによると徳川昭武が松戸に所有していた土地は約70,521㎡となる。当時から現在に至るまで、相当数の合筆、分筆、所有権移転などが行われているため、この史料を読むだけで各筆の場所を明確に特定することは難しいが、ここに記される字名を抜き出すと戸定、戸定下、根古屋、市台（壺台か）、神田、七畝割、新萩、川萩、大橋道、虹引、白山となる。大橋道など少し離れた場所を除いた大まかなイメージで言うと、現在の戸定みその坂がある北斜面、戸定が丘歴史公園、福島県学生寮跡地、千葉大学松戸キャンパスの一部が徳川昭武の所有地だったのだろう。

表2 千葉中学松戸分校、松戸中学関係記事

年	月	日	史 料
34	5	25	一、千葉県書記官吉見輝、当郡長・中学校長・町長某他三名伺候候事
34	9	12	一、安藤利吉並二大貫精三郎、中学校敷地事件二付、参邸シタリ
35	2	6	一、中学校敷地用地所売却代金六百七拾円七拾貳銭貳厘ノ現金ヲ安藤權左衛門次男謹造持参セシニ付、仮証ヲ差出シ、追テ本邸ヨリ交付アルベキ本証書ト引換ノ筈ナリ、又金参百円ノ寄付金領収証ヲモ納付アリタリ
35	5	1	一、町長大貫精三郎・小島某、道敷境界立会之為メ来邸シタリ、是ハ中学校二通スル県道之所也
36	1	23	一、千葉県庁より土木技手参邸、中学校井戸穿掘上地盤ノ高低井水ノ深淺等比較測量致度旨、開陳スルヲ以テ、之ヲ許容、測量セシメタリ
36	5	7	一、千葉中学校松戸分校へ青桐二基寄附致候処、本引取候事
37	11	5	一、当地中学校二於テ運動会アリタリ
38	1	1	一、松戸中学校長伊藤平章外六名、年賀之為参邸シタリ
39	3	24	一、当郡書記并二町長増井雄一、中学校継続二付、寄付金御下賜之儀申出タリ
39	4	27	一、大作棟次郎は中学校寄付云々二付、出頭シタリ
39	5	4	一、元中学校長前条赴任二付、安食裕は停車場迄見送タリ
39	5	29	一、当中学校長勘解由小路資承君、新任披露之為参邸シタリ

（「戸定邸日誌」（戸定歴史館蔵）より）

園芸学部との歴史的関係

館長をされております。齊藤名誉館長に本学と徳川家の土地の歴史的関係について寄稿を頂きました。

ところで、松戸キャンパスの歴史は明治42年4月、千葉県立園芸専門学校の創立に始まるので、この時点で松戸キャンパスは存在していないが、現在の松戸キャンパス内の土地の売買を徳川家は行っていた。

先ほど触れた「反別帳」の地目「畑」の表の欄外に「中学校敷地トシテ売却、反別四反五畝貳拾九歩、山林貳歩也、此代金九百七拾円七拾貳銭貳厘」との記載がある。所有地4,550.7㎡を970円72銭2厘で売却したというのである。

この内訳を「反別帳」に探ると、土地を中学校に売却したと判断できる記載のある筆が15あり、字名は全て「戸定」である。番号659、660、663、664、665、6586の6筆には「中学校敷地用ニ売却 明治三十四年十一月廿八日」とあり、面積の合計は1,686.3㎡。他の番号649-1、650、651、653、655、692-1、694-1、695-1、719-1（これのみ地目山林）の合計は5,382.3㎡である。15筆の合計は7,068.6㎡となり、先述した「反別帳」筆者による書き込みの面積4,550.7㎡とは約2,500㎡ほどの差がある。売却日時が特定できるのは上記の6筆分だけで、その面積は1,686.3㎡なので、売却日が特定できない面積が5,000㎡以上含まれていることになる。

では、中学校とはいかなる中学校であろうか。

戸定邸で働く職員が邸内での日々の出来事を記録していた「戸定邸日誌」から中学校に関する記事を表2にまとめた。36年5月7日の記事から中学校とは「千葉中学松戸分校」であることが判る。38年1月1日の時点では「松戸中学校」となっているので、松戸分校が閉校した後、松戸中学が設立されたことと符合する。

全体の流れを略術すると、中学校敷地について、34年5月25日、昭武に相談があり、35年2月7日には売却代金と寄付金の領収書を受け取っている。36年5月7日

には「青桐二基」を寄付している。青桐に特別なこだわりを持っていた昭武がわざわざ寄付までしているので、かなり立派なものではなかったかと想像される。

39年3月と4月には松戸中学存続のために寄付を求められている。千葉県立園芸専門学校創立以前、中学校設立や運営、存続などに徳川昭武は関わっていたのである。

この一連の記事で興味深いのは、35年2月6日の「中学校敷地用地所売却代金六百七拾円七拾貳銭貳厘」とあり、「金参百円ノ寄付金領収証ヲモ納付アリタリ」とある点である。これは売却代金670円72銭2厘と300円の寄付金の領収書を受け取ったという意味で、これは「反別帳」で土地を970円72銭2厘で売却したという記述に符号する。売却代金の内、300円分は寄付したので受け取った現金は上記の通りということになる。

ここから、35年2月6日時点で徳川昭武が売却した土地の面積は4,550.7㎡、先に触れた7,068.6㎡の差分、2,517.9㎡はその後の売却ということになる。

この後、徳川家からの売却はなかったのだろうか。十分な調査を行っていないのが現状であるが、昭武の次男武定が大正2年4月20日に園芸学校に5,600㎡ほどの土地を売却している。この面積の中に、先ほど記した売却時期が特定できない2,500㎡余りの土地が含まれているのか、いないのかまだ確認できていない。この現状を踏まえると、現在の松戸キャンパス内の徳川家旧所有地は約10,000㎡から場合によっては12,000㎡ほどということになる。

なお、42年以降、徳川家と園芸専門学校（高等園芸学校）と土地の売買（残念ながら面積についての記載はない）、寄付金などで様々なやりとりをしていることが「戸定邸日誌」の記事から判るが、紙幅が尽きているので今回はここまでとしたい。



写真1 左上の戸定邸に接して書院造庭園、その右下に東屋庭園が続く。東屋庭園の右下側は、写真2の平面図左端上部に接する。



写真2 湯浅四郎助教授（測量を担当）作成の千葉県立高等園芸学校平面図。千葉大学附属図書館松戸分館所蔵。大正6年頃作成と推定される。

ご存じでしたか 我らが同窓生探訪

取材者：戸定会会長 加 藤 一 郎

園芸学部隣接する戸定歴史館齊藤名誉館長に戸定会報へ寄稿をご依頼に伺った時に、渋沢栄一氏の生家がある埼玉県血洗島が話題となりました。その時に戸定会埼玉支部の支部総会時に吉岡重明さん（昭和53年園芸別科修了、戸定会埼玉支部、戸定会本部推薦理事）が代表取締役をされている埼玉県深谷市血洗島にある有限会社ファームヤードを視察したことを思い出しました。彼に電話をしたところ驚きの事実が分かりました。放映中のNHKドラマ「青天を衝け」の主人公、渋沢栄一氏の姉、渋沢なかの嫁先が吉岡家だったのです。渋沢家は吉岡家から、約300mくらいの位置に近接しております。彼は従業員50名を雇用して、ネギ 25ha キャベツ 28ha 枝豆18haなどを73haで生産・販売をしております。本人が農作業で多忙なため寄稿を得ることを諦めて、私がメールでの聞きとりをしての取材記事とさせていただきました。

Q・ 渋沢栄一氏の姉のなかさんと吉岡重明さんとの関係は？

吉岡：栄一の姉の渋沢なかが当家（本家）に嫁いできております。私は玄孫にあたります。また、パリ万博に行った際のお土産としてギヤマンをいただきました。

Q・ 「血洗島」の由来は？

吉岡：土地が荒れていたことから「チアライ」と言われたり、利根川の氾濫が頻繁に起こり「地」が洗われていたことからとも云われています。諸説ありましていまだ定説には至りません。

Q・ 藍の生産からネギ生産に切り替わっていった経過を教えてください。

吉岡：江戸時代半ばより生産しておりました。明治13年にドイツの科学者が、天然の藍と同一の化学構造を持つ合成藍を発明し、価格暴落により国内生産が衰退しました。深谷市内にある「西島」「内ヶ島」「血洗島」などの「島」がつく地名は、かつて利根川の氾濫によって生じた微高地であるといわれます。しかし、幾度の氾濫によりこの地域には肥沃な土壌が形成されこの沃土は粘質が高く硬いのが特徴で、また水はけが良くネギを育てるために

は最適な土壌です。明治16年（1883年）頃からネギの生産を始め、高崎線（現JR）が開通し深谷駅が出来てから徐々に「深谷ネギ」が定着してきました。

Q・ ファームヤードについてテレビ局の報道が随分なされましたね。

吉岡：NHK、ヒルナンデス（日本テレビ）、モーニングバード（テレビ朝日）などで報道をいただきました。また2021年12月、JICA筑波センターから、海外からの研修生に対する「農産物の安全管理体制強化 GAP」の事例紹介の為に取材をしたいとの要請があり対応致しました。

Q・ 吉岡さんの学生時代はどのような思い出がありましたか？

吉岡：麻雀などをやり、あまり勉強はしなかったのですが、故北条先生には厳しく鍛えられました。

Q・ 思い出しました。戸定祭でお互いに生産した農産物を出店して、松戸市民にどちらが美味しいかの師弟対決をする企画もありましたね。

吉岡：惜しい先生を亡くしました。

取材を終えて

渋沢栄一氏の家系図を送っていただいたところ、父渋沢市郎右衛門氏は栄一氏の姉なか氏、妹のてい氏の1男2女の家族で、ご子孫には児玉源太郎、三島通庸、岩崎弥太郎氏のお孫さんなどおられる華やかな一族に属していました。吉岡重明さんも渋沢家一族の商才などを引き継ぎ、日本農業の発展などに貢献されることと思います。

NHKドラマ「青天を衝け」をご覧になる際には同窓生吉岡さんのことを思い出していただければ幸いです。



渋沢栄一氏がパリ万博に行った際のお土産としていただいたギヤマン

園芸学部・園芸学研究科・園芸学研究院 何が違うの？

園芸学研究院長 松岡延浩

昨年の戸定会報では園芸学研究科長という肩書きで冒頭の挨拶をさせて頂きましたが、今年は園芸学研究院長という肩書きになっています。何が違うの？と加藤一郎会長からご質問を頂いたので、今年4月改組によって発足した園芸学研究院の概要を含めて従来の園芸学部・園芸学研究科の関係を説明してみたいと思います。

大学は文部科学省の考えに沿って、数年おきに改組（組織変更）を行います。今年の4月にも改組が行われ、昨年度までの園芸学部・園芸学研究科は、学部生が所属して教育・研究の指導を受けるための園芸学部、大学院生が所属して教育・研究の指導を受けるための園芸学研究科、教員が所属して研究を行うための園芸学研究院の3組織に分かれました。現在は園芸学研究院に所属する教員が、園芸学部と園芸学研究科の学生に講義・実験・実習の指導を行っているということになります。今のところ、園芸学部・園芸学研究科で教える常勤教員は、基本的に園芸学研究院に所属しているの、便宜上、園芸学研究院長が園芸学部長と園芸学研究科長を兼任することになっています（環境健康フィールド科学センター等、千葉大学他部局に所属する一部教員にも同等に園芸学部・園芸学研究科のカリキュラムを担当して頂いています）。ですから、今年度の私は、園芸学部長でもあり園芸学研究科長でもあるのですが、こういうときに使う肩書きは、より上位の園芸学研究院長となるのです。

では、今年の4月から発足した園芸学研究院という教員の組織とは何か？という疑問が生じます。それは後でお話しさせて頂くこととして、とりあえず、1949年新制大学千葉大学発足以降の戸定会報での部局長挨拶の肩書きの変化を振り返ってみましょう。戸定会会則第8条で「本会は千葉大学園芸学部長を名誉会長とする」とあり、名誉会長がご挨拶を書かせて頂いています。1949年に園芸学部が生まれますが、そのときは大学院がありませんでしたので、教員・学生は全て園芸学部に所属していました。そのときの戸定会報での肩書きは、そのまま園芸学部長でした。その後、大学院として1969年に園芸学研究科（修士課程）、1988年に自然科学研究科が設置されました。その間、学生と一部の教員は本部が西千葉にある自然科学研究科の所属になっており、当然、自然科学研究科長もいたわけですが、ご挨拶は会則通り園芸学部長が書いています。

その後、2007年に行われた改組で、園芸学研究科が設置されます。このとき、大学院の教育・研究を高度化するため、教員の所属も園芸学部から園芸学研究科に変わりました。基本的に園芸学研究科に所属する教員が園芸学研究科の学生を教育するだけでなく、園芸学部に学部生を教えに行く形となったのです。従って、それ以後、園芸学研究科長が園芸学部長を兼任することとな

て、戸定会報での肩書きは園芸学研究科長となりました。これが、2020年度まで続き、私も昨年度は研究科長の肩書きで、ご挨拶を書かせて頂きました。長くなりましたが、これが戸定会報で使われた学部長、研究科長、研究院長という肩書きの歴史です。

さて、先にお話しした「今年の4月から発足した園芸学研究院という教員の組織とは何か？」という話に戻ります。これには、文部科学省が進める（勧める？）大学の「教教分離」政策に沿ったもので、平成30年度文部科学省委託調査「大学の組織運営改革と教職員の在り方に関する研究 最終報告書」に詳しく書かれています。ご興味のある方はそちらをご覧ください。「教教分離」とは、大学の組織を教育組織と教員組織に分けることです。園芸学研究科を例にすると、これは昨年度まで教員と大学院生はどちらも園芸学研究科という1つの組織に所属していましたが、先に述べたように今年から教員は園芸学研究院に所属し、大学院生のみ園芸学研究科に所属するようになりました。

教教分離には、様々なメリット、デメリットがありますが、今回の改組の目的は園芸学研究院の研究力を強化することでした。そのため教育内容とは別の角度から、将来園芸学研究の発展に必要と考えられる課題を30代から40代の教員に検討してもらい、そこで提案された植物生命科学、園芸環境科学、食と緑の健康創成学、先端園芸学、ランドスケープ・経済学という5研究課題に特化した講座を構成しました。教員は学科やコースの教育を担当しますがそれらに所属せず、5研究課題解決のために研究院に作られたそれぞれの講座のいずれかに所属して研究を進めています。これらの所属に教員個々の希望に十分答えられなかったことはありましたが、将来を考えて改組に踏み切りました。個々の教員の配置はホームページをご覧頂きたいと思いますが、講座の教員は、その目的を達するために様々な学科の教員から構成されています。また、将来は医学研究院、工学研究院等の他研究院の教員と共同で、学部を超えた教育組織（学位プログラム）を作ることにも可能です。

これらのことが、園芸学部、園芸学研究科、園芸学研究院の違いです。現在、講座ごとに将来を見据えた研究計画を検討しています。これをもとにして、新しい研究が展開していくことを期待しています。園芸学部が、園芸学科、応用生命科学科、緑地環境学科、食料資源経済学科から構成されていること、園芸学研究科が、環境園芸学専攻（園芸科学コース、ランドスケープ学コース）から構成されていること、そして、それらを踏まえた歴史のある教育内容は今年度も変わらずに進められています。今後の園芸学部、園芸学研究科、園芸学研究院の発展にご期待下さい。

戸定会から見た原風景

戸定会会長 加藤 一郎

戸定会の皆様にはご健勝にてご活躍のほどと存じます。

新型コロナウイルス蔓延で、2年連続で理事会総会は書面となりましたが、全議案が承認されました。この場をかりて理事の皆様方のご協力に感謝を申し上げます。

今年の戸定祭の開催は残念ながら中止となりました。11月7日(日)に園芸学部主催・戸定会の協賛として「アカデミック・リンク松戸完成記念オンライン講演会」を企画しました。新型コロナウイルスが収まりましたら、新図書館と隣接する「緑のテラス」とあわせて園芸学部隣接する徳川15代将軍慶喜の弟・昭武の私邸だった戸定邸と庭園(藤井英二郎名誉教授が明治後期の状態に復元)を是非ご見学頂きたいと思っております。戸定歴史館の齊藤名誉館長はNHKドラマ「青天を衝け」の時代考証をされており、今回の寄稿文に記載されておりますように、明治34年に県立千葉中学校松戸分校建設の際、徳川昭武から用地を購入し、その土地を千葉県立園芸学校がその後購入し、現在の園芸学部につながっています。このように園芸学部は水戸徳川家と深い縁があります。

大学制度が大きく変わろうとしております。学長権限が大きくなり、教育と研究の分離がなされます。私は学外から戸定会の役員に就任しましたが、学外から大学の現状を見ると、学部間、研究室間の縦割りが強く、その弊害が見受けられることがあります。今後、その縦割りに如何に横串を刺すかが問われているように感じます。

戸定会本部役員は、松岡園芸学研究院院長ほか戸定会関連の先生方、大学の事務担当課長とパートナーシップ会議を毎月開催して、大学と戸定会との課題の共有化を進めております。支部総会が対面で開催できるようになりましたら、大学、戸定会が抱える課題の共有化と支部活動活性化に協議したいと思います。

大学研究室の予算は削減され極めて厳しい状況です。戸定会として研究室に寄付ができればと思います。皆様からの戸定会への寄付が、毎年一定額が集まるようであれば、今後検討すべき課題と考えております。

卒業生の名簿は11年間発行しておりません。今年から作業に着工して、個人情報の管理に留意して、来年末には皆様のお手元に届くように努力いたしますので、是非ご購入のほどお願い申し上げます。

本年度から就任した本部推薦理事の方々には、新型コロナウイルスの感染阻止に充分留意しつつ特定のテーマについて検討をして頂くこととしております。

女性活躍推進法の施行、ジェンダー平等、ダイバーシティ(多様性)の確保が求められております。戸定会の各支部の常任理事、理事の構成は女性が極端に少ない状況となっております。是非、女性の理事登用に全支部をあげて取り組むことをお願いします。

新型コロナウイルス感染症禍下の園芸学部

園芸学研究院院長 松岡 延浩

昨年は新型コロナウイルス感染症の問題が発生して思いもかけない新学年開始となりましたが、今年になっても感染症の問題は収束する気配がありません。現在も松戸キャンパスでは、昨年に引き続き教職員・学生以外の入構を禁止しています。その中で、ポストコロナに向かって、教職員・学生は教育・活動を再開しています。

ご存じのとおり、昨年度入学生から、報道でも話題になった全員留学が導入されましたが、全ての留学プログラムが中止になってしまいました。学生の自主的な海外渡航もまだ禁止されています。これらは10月以降に再検討される見込みです。

千葉大学では、昨年度の講義はメディア授業(インターネットを使った遠隔授業)中心に行われましたが、今年度から対面授業(従来の講義室などで教員と学生が相対して行う授業)も併用して行われています。昨年度の経験をもとに感染症禍でできる最善の講義形態を模索して、松戸キャンパスでも、感染防止の細心の注意を図りながら対面授業が開始され、その数も徐々に増えてきました。私も4月に1年ぶりに2年生(昨年度入学生)の対面授業を行いました。「大学らしい講義を初めて受けました。メディア授業のいい点も多いですが、対面の方もいいですね」と学生からいわれました。確かに、メディア授業は教職員・学生をできるだけ外出させないでできること、講義内容でわからないところがあれば繰り返し視聴できること、海外においても受講できることなど長所もあるのですが、学生にとって対面授業は、教員と直接会話したり、友人と知り合う機会になるなど人と人のふれあうことにより、よりよい学びにつながるようです。どのような状況でも、できる限りの教育活動を続けて行けるように日々考えているところです。

一昨年11月にアカデミック・リンク松戸(附属図書館松戸分館)が竣工したことは昨年度の会報で報告させていただきましたが、昨年11月にそれに付随するランドスケープ「緑のテラス」が、皆さまからのご支援のもとに完成しました。歴史的な庭園群と並ぶ令和のランドスケープとして、後世に伝えていければと思います。全学の方針で今年も戸定祭およびホームカミングデーはありませんが、今年はその時期に松戸分館に所蔵する絵画や古図書の展示会を催す予定です。申込制で人数に制限がありますが、是非ご参加下さい。

昨年に引き続き、戸定会会員の皆さまから、生活に困窮した学生や研究者を志望する学生に対する多大なご寄付をいただきました。書面ではございますが、お礼申し上げます。今後ともさらなるご協力をよろしくお願い申し上げます。



退職のご挨拶

園芸学科 教授 近 藤 悟

千葉大学園芸学部には、2007年4月より勤務し2021年3月に定年退職を迎えました。3番目の職場で、以前の大学等同様に14年間勤務させていただきました。この間、教育研究企画委員長、園芸学コース長、学務委員長などを務めさせていただきましたが、園芸学部教職員および戸定会の皆様には職務を支えていただき、大変にお世話になり感謝いたします。園芸学部はアジア、ヨーロッパ、アメリカをはじめ世界各国の大学と姉妹提携があり、タイ、中国、イタリア、ドイツ、スウェーデン、フィンランド、インドネシアなど多くの海外の大学の教員の皆様と教育および研究を通して交流を持つなど、貴重な機会をいただきありがとうございました。またこれらの大学から、博士および修士課程に優秀な多くの留学生を受け入れることもできました。研究室では日本人学生も必然的に英語を使う場面も多くなり国際的感覚を養う場になったのではないかと考えております。

国立大学では研究費の多くを外部から獲得してくる必要がありますが、幸いにも科学研究費、省庁からの研究費および企業からの受託研究費、奨学寄付金などをいただくことができ、高速液体クロマトグラフィーマスマスペクトロメトリー、ガスクロマトグラフィーマスマスペクトロメトリー、定量RT-PCR、電子顕微鏡などを購入することができ、研究室の学生とともに研究を進めることができました。

自身の研究は、ブドウ、リンゴ、ナシ、モモ、ウメなど果樹および果実の発育生理と植物ホルモンの関連に関して進めてまいりました。研究に参加いただいた多くの皆様のご協力があり、発表あるいは特許として申請することができ感謝しております。2017年には、国際園芸学会のシンポジウムである「果実生産における植物成長調節剤の利用」を千葉で開催することができ、多くの国々から200名の研究者に参加していただきました。果樹研究室のスタッフ、学生、国内外の研究者の皆様のおかげで無事に終了することができ感謝しております。

4月からは、研究テーマ「ブドウの色素・糖合成促進プロセスへのABAシグナル伝達と光応答のクロストーク解明」が3年間科学研究費に採択いただきましたので、引き続き園芸学部で研究を継続しております。今後も園芸学部および戸定会の皆様の発展にいつでも協力したいと考えております。皆様のますますのご発展とご健勝をお祈り申し上げます。



退職のご挨拶

園芸学科 教授 丸 尾 達

本年3月末をもちまして、定年退職となりました。私は園芸学部、昭和50年4月に入学して以来、大学院園芸学研究科（修士課程）を経て、昭和56年に助手として就職しましたので通算46年間（奉職してから40年間）園芸学部・園芸学研究科にお世話になりました。学部3年以降は一貫して蔬菜園芸学研究室（現蔬菜園芸学研究グループ）に在籍してきました。まさに園芸学部一筋の教育・研究生活を送らせて頂きました。これまで多くの先生方をはじめ事務職員の皆様、戸定会の諸先輩方や事務局の皆さん、さらには生協の職員の方々にも言葉では言い尽くせないご支援を頂き、何とか無事に退職を迎えることが出来ました。改めて、心から御礼申し上げたいと思います。

幸いなことに、教育・研究面では好きなことを思う存分させて頂き、定年までの10年間は柏の葉も含めて植物工場に係る仕事を中心に充実した期間を過ごすことが出来ました。

また、園芸別科の廃止や園芸産業創発学プログラムの立ち上げについても多くの皆様のご助力を得て積極的にかかわらせて頂きました。その過程で、改めて園芸学部や戸定会の歴史と社会的な使命を再確認した面も少なくありませんでした。

さて、退職後4月からは、公益財団法人園芸植物育種研究所（園研）に理事長として勤務しておりますが、今のところ公益財団法人の立場も含め、その責任と求められる管理・運営業務に日々もがいているところです。少しでも早く前任の伊東前理事長に近づけるよう努力しているところですが、戸定会の諸先輩方にも関連業界の方が多くおられますので、多面的なご助言・ご指導を頂ければと存じますので宜しくお願い致します。

4月に伊東前理事長から前身の財団法人日本園芸生産研究所の創設当初の話をお聞きする機会がありました。お話では、昭和23年に当時の武田校長（千葉農業専門学校）に、戸定会の岩田喜雄会長より個人のお立場で多額の募金が寄贈され、それを原資に園研が設立されたとのことでした。そして戸定会が直接かわる形で、今という学内ベンチャー的な組織を通じて、広く野菜の育種等を進めてきたとのことでした。そのお話を聞いて益々その責任の重みを痛感しているところです。

最後に園芸学部および戸定会のますますの発展を祈念するとともに園研の研究開発にも皆様方のご助力を心からお願いする次第です。長い間本当にありがとうございました。



「退職のご挨拶」

園芸学科 教授 犬 伏 和 之

2021年3月末に定年退職を致しました。千葉大学園芸学部は在職27年半、本当に多くの皆さまにお世話になりました。この場をお借りして改めて心より御礼申し上げます。この間、学生・院生諸君や国内外の研究者と進めた教育・研究や経験は生涯の宝物であります。大学院の改組も2回、法人化、学長補佐などに携わる機会もあり、国際交流では多くの留学生が帰国後、母国で活躍し、また協定校との国際連携などが発展してきました。千葉県や関東甲信越などとの地域連携も進み、社会人院生も多く巣立って行きました。



最終年はコロナ禍で、1月に中国の海南大学で集中講義したのち帰国途上の香港空港では武漢からの乗り継ぎ客への警戒が高まり、成田空港でも検疫が強化され始めていました。さらに2月にはインドやマレーシアでも現地調査がギリギリ決行できたものの3月の計画は中止となり、その後は国内外の出張も停止しています。突然のオンライン講義やゼミ、海外との昼夜逆転のオンライン国際会議、協定校からの急なご指名でのウェビナーなどなどデジタル弱者の高齢者には大変な日々でした。ちょうど20年ぶりの教科書の改訂が最終段階だったので、緊急事態宣言下、隔々まで念入りにチェックして秋からのオンライン授業でさっそく活用できたのはせめてもの救いでした。オンデマンド授業だったので受講生も200人近くで例年の倍程度となり評価は大変でしたが、学会で作成してあった小中学生向け土壌教育ビデオを授業でも紹介し、授業で得た知識をどう小学生たちに教えるか、あるいは土壌断面をどう調査するかを、レポートにまとめてもらうなど、これまでになかった取り組みができたことも日ごろの備えが重要と痛感した次第です。最終講義も素人編集ながらオンライン配信でき、学部ホームページ、トピックス・イベント情報からまだご覧いただけるようです。<https://kystrmapsrv.chiba-u.jp/video/V033915/001uZMYoyhIT6E2TkzV/>

現在、コロナ禍で特別に延長された国際プロジェクトを担当する特任研究員を務めながら、グランドフェローとして週1、2回ほどキャンパスに来ております。特に構内圃場に先代教授が作られた千葉県の代表的畑土壌6種類を充填したコンクリート枠試験の再生に研究室を挙げて取り組んでいます。県内の試験場の機構改革や農家の世代交代も進み、感染防止に配慮しながらの土壌調査、採土、復元作業が将来へのレガシーとなるようお手伝いしています。相変わらずのオンライン会議もだいぶ慣れ、地球の裏側と日常的に議論できるのは往復の時間などを考えれば隔世の感ですが、パンデミックが終息して日常に戻る日を待ち望んでいるところです。皆さまにおかれましても新生活様式に適應して、益々のご発展とご健勝を祈念申し上げます。

退職のごあいさつ

緑地環境学科 教授 三 谷 徹

2020年7月をもって、長らくお世話になりました千葉大学園芸学研究科から異動いたしました。2003年より、17年以上在職したことになり、小生としては人生中最も長い職場になったのではないかと思います。

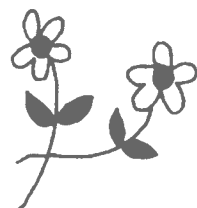


2003年春、戸定ヶ丘キャンパスに足を踏み入れたときの印象は、新鮮な驚きであり今でも忘れることができません。それは校舎のあちこちに葉や小枝、土くれの落ちていることでした。小生は工学系建築出身のため、校舎から土の匂いがするという経験はありませんでした。また研究室のあるA棟はキャンパスの一番奥、大きなクスノキやヒマラヤスギに囲まれ、常時葉擦れの音、風に落ちる小枝の音に囲まれていました。研究室がフランス庭園を見渡せる位置にあったことも大変幸福であったと思います。

このような空間の印象は、そのまま戸定ヶ丘キャンパスに通底する一つの思想につながるものだったように思います。自分の専門は、ランドスケープ学の中でもデザイン・設計の実践に関わるものでしたが、それを支える広範な、森林、土壌、気象などの専門領域の先生方に囲まれていたことは、大きな財産であったと気づきます。大学は学生教育を媒介として、様々な機会に多領域の先生方の専門に触れますが、そこから垣間見える世界観が、自分のデザインの成長に大きな影響を与えたと思います。戸定会からも折に触れ、学生の自主企画などに多くの支援をいただき、多方向の交流が生まれ続けたと思います。

昨年東京大学の建築学に移り、研究室の前に「ランドスケープ学」と表札を掲げました。これは戸定ヶ丘キャンパスから与えられた貴重な財産を、工学系建築の若者にプレゼントしたいという気持ちでもあります。

世の趨勢はまさに、千葉大学園芸学の伝統が長く熟成してきた世界観を求めているのではないのでしょうか。原発事故があり、パンデミックもありました。しかし、500万年を通じて人類が求めているものは、何も変わっていないと思います。その研究の場として、戸定ヶ丘キャンパスは、大変貴重な場であると信じます。これからの皆様の益々のご発展を祈っております。



退職にあたって

食料資源経済学科 准教授 吉田 義 明

吉田が園芸学部に着任したのは1988年6月であった。経済学部の大学院卒でそれまで農業経済学と社会政策学を専攻していたので「まず実習をなさい」とのことで北条雅章先生ご指導の下で学部と別科の実習を担当した。以来、約33年の長きにわたって在職することになった。



園芸学部に着任して有難かったことは各地でOB・OGが活躍されていることである。農業経営の教育研究を行うにあたってたいへんお世話になった。税務申告のデータなど普通は見せてもらえないものを頂いたり、面倒な農作業記録などの記帳などを委託したり、今から思うとずいぶんと無理なお願いをしたものである。このようなお付き合いの中でいつの間にか、ご厚誼に応える意味でも学生に成果を還元しなければという気持ちが強くなっていった。

国内では北関東・東北地方の農業経営を中心に調査を行っていたが、2000年以後は海外の園芸経営調査が多くなっていった。環境問題がこの背景にある。花卉の上田善弘先生から「欧州の環境規制が厳しくなるから中国、東南アジア、中南米、アフリカに園芸の拠点が移動している」と示唆されて、オランダから始めて、手探りでこの新たなグローバリゼーションの調査を始めたのである。その間に検疫、種苗、植物知財などの問題が21世紀の園芸グローバリゼーションに固く結びついていることを学んだ。米国ではサリーナスの内田慶四郎・十郎ご兄弟、アンディ松井氏、サンゲブル・ナーセリーの石原三郎氏、教大園芸の永田英夫氏などに教えをうけた。また中国では三雄種苗の肖建成、余永輝両氏のOBにお世話になった。なかでもとくに長期間お世話になったのは北タイで大規模花農場を経営されていた齊藤正二氏である。古在元学長や三位正洋先生らと植物同好会で活躍されていたのでご存知の方も多いと思う。花卉の安藤敏夫先生のご紹介で農場に初めて伺った2001年から2017年大晦日に亡くなられるまで、実に多くのことを教えて頂いた。この間に吉田に同行して北タイの農場を訪れた学生は20人以上にのぼり、うち幾人かは長期間インターンとして受け入れて頂いた。あらためて過去のメールを調べてみたが平均して年3回は訪問し、17年間で600通以上のメールのやり取りがあったことに驚いた。

この場をかりて、これらの方々にも長期間にわたって園芸学部ならではの農業経営学講義を支えて頂いたことに心から感謝を申し上げたい。

新任のご挨拶

食料資源経済学科 教授 吉田 行 郷

戸定会員の皆様、はじめまして。吉田行郷と申します。私は2021年4月より園芸学研究科 園芸科学コースの食料資源経済学領域 フードシステム学分野に教授として着任致しました。本学着任以前は、農林水産省で20年間行政官として勤務した後、同省農林水産政策研究所にて、16年間、農福連携、国産麦のフードシステム、企業の農業分野への参入、集落営農組織の経営問題、災害からの復興等に関する研究に携わってきました。



本学では、農業分野での障害者の就労の場、居場所づくりを行う「農福連携」の研究を中心に、これらとも密接に関係する企業の農業分野への参入や有機農業に関する研究にも取り組んでいく予定です。大きな転換期を迎えている国産小麦・国産大麦のフードシステムに関する研究についても取り組んでいきたいと考えています。

これらのうち、特に農福連携については、10年前にはニッチな研究分野と言われることもありましたが、その後、農業と障害者の親和性の高さや、取組が農業サイド、福祉サイド双方の課題解決に結びつくことなどが研究成果として明らかになるにつれて、農林水産省、厚生労働省が本格的にその推進に取り組んできただけでなく、法務省、文部科学省も支援に乗り出すなど、大きく情勢が変わってきています。また、この10年間で、農業分野で障害者の就労の場を作る取組は大きく前進しましたが、オランダで「ケアファーム」という制度の下で盛んに取組まれている障害者や認知症高齢者のデイケアを農場で行う取組は、まだまだこれからという状況です。しかし、こうした取組は、国土交通省で都市部における農地の政策的な位置付けが大きく変わり、農林水産省も推進に力を入れつつある「都市農業」との親和性も高く、注目を集めつつあります。本学でも取組まれてきた園芸療法とも関係が深く、今後は、こうした取組の拡大に資するような研究に力を入れていければと思っています。

また、本学の環境健康フィールド科学センターでは、私の着任前から、既に履修プログラムとして「多様な農福連携に貢献できる人材育成プログラム」が実施されていますので、今後、このプログラムにも積極的に関わっていただけでなく、このプログラムとの連携も意識した研究や教育を行っていきたいと考えております。

OB、OGの皆さんにおかれましても、是非、こうした研究やプログラムへのご理解とご協力を賜りますようよろしくお願い致します。

新任のごあいさつ

緑地環境学科 教授 武田 史 朗

2021年4月に園芸学研究院ランドスケープ・経済学講座に着任いたしました、武田史朗と申します。どうぞ、よろしくお願いいたします。戸定の丘という歴史ある場所にあるキャンパスでの研究・教育活動に参加する貴重な機会をいただき、とても嬉しく思っております。



専門分野は、ランドスケープと建築のデザインです。2020年度までは立命館大学の建築系の学部でランドスケープデザインの研究室を運営していました。本学ではランドスケープ学コースで経験豊富な章俊華先生と庭園学デザイン研究室を共同で運営をさせていただけることになり、とても心強く感じております。

小職自身は工学部で建築の学部教育を受け、建築設計実務を経てランドスケープの設計実務に触れ、30歳近くになってから米国の大学院でランドスケープアーキテクチャの教育を受けました。その後、上記の通り建築系の学部でランドスケープと建築の研究・教育と実務に携わりました。

建築系の学科でランドスケープに中心的な関心を持つ学生を毎年多く育てるのは容易ではないですが、ここ数年、建築の学生の中にもランドスケープを真剣に志す学生が増えてきたな、というのが実感です。工学部では、環境への配慮など目に見えにくい事柄への学生の関心は、CO₂削減などに関わる設備やエネルギーなど、技術系分野への関心に具体化していくことが多く、デザイン系の学生にランドスケープの分野に関心を持つ学生が増えてきたのは、気候変動と災害の激甚化、人口減少による将来の地方都市の姿の不透明性、少々高齢化社会において、住みやすく魅力的な都市空間など、より身近な課題に対する反応だろうかと考えます。

こうしたテーマは建築や土木、都市計画といった他分野にわたる議論が多くなります。そこに、ランドスケープという分野が持つ総合的、融合的な視点の役割を感じることもありました。松戸というランドスケープの研究・教育の中心拠点が、さらに園芸以外の分野と繋がり、協働的な都市空間デザインに関する議論のプラットフォームになるようなことも、望ましい方向性の一つかとも感じております。そのような未来を語るにはあまりにも微力なので、まだまだこれからというところですが、皆さまのご指導を賜りつつ、少しでもお役に立てるよう努力してまいりたい所存です。今後とも、どうぞよろしくお願いを申し上げます。

新任のごあいさつ

園芸学科 助教 濱 侃

令和2年10月1日に着任いたしました園芸学研究院先端園芸工学講座助教的濱侃と申します。下の名前が珍しいかと思ひます。名前の由来は四字熟語の侃侃諤諤です。生まれは神奈川県横浜市ですが、小中高と山梨県宇都宮市で過ごしました。現時点では、松戸キャンパスで最も若い教員のようです。専門は農業気象学とリモートセンシングで、ドローンなどの近接からのセンシング技術を作物モニタリング技術に応用した“スマート農業”に関わる研究を行っております。



着任して色々新鮮な経験をさせていただいており、あっという間に半年以上が経過しました。現在は、生物環境気象学研究グループの一員として、キャンパス内の研究圃場においてサツマイモを栽培し、センシング技術に基づくサツマイモのスマート管理に関する研究を行っております。栽培品種は、べにはるか、ベニアズマに加えて、シルクスweetや安納芋も栽培しています。これまでは、各県の試験場などとの共同研究が主で、実際に自分自身で栽培を行いながらの研究は長年の夢であり、園芸学研究院に着任したことでやっと叶えることができました。

着任して色々新鮮な経験をさせていただいており、あっという間に半年以上が経過しました。現在は、生物環境気象学研究グループの一員として、キャンパス内の研究圃場においてサツマイモを栽培し、センシング技術に基づくサツマイモのスマート管理に関する研究を行っております。栽培品種は、べにはるか、ベニアズマに加えて、シルクスweetや安納芋も栽培しています。これまでは、各県の試験場などとの共同研究が主で、実際に自分自身で栽培を行いながらの研究は長年の夢であり、園芸学研究院に着任したことでやっと叶えることができました。

教員として教育は大切にしていきたいと思ひます。学生には、在学中に何か打ち込めるものを見つけることの重要性を教え、研究活動を通して大学での居場所（学生が打ち込める環境）を提供したいと思ひています。さらに欲を言えば、大学生活で培ったものを誇れる人材であり、次の世代にそれを繋げていくことができる人材を育てていきたいと考えております。今後、持続的により良い社会にしていけるためには、1人が関わることができる人材は限られます。しかし、人材を育てることができる人材を育てるという関係を継続することができれば、その裾野は広くより多くの人の豊かさを向上させることにつながると考えています。

まだまだ青二才ではございますが、園芸学部のさらなる発展に寄与できるように精進いたします。今後ともよろしくお願いいたします。



園芸学科の近況

園芸学科長 教授 椎 名 武 夫

園芸学科の近況をお知らせします。令和2年度に学部62名の卒業生、博士前期課程36名、博士後期課程13名の修了生を送り出しました。さらに令和3年4月に学部67名、博士前期課程30名、博士後期課程6名の新入生を迎えました。

卒業生の進路は、学部の場合、進学48%、公務員8%、製造業6.4%、情報通信業1.6%、学術4.8%、種苗・農業1.6%、流通業8%、サービス業8%、などとなっています。博士前期課程の場合、進学5.5%、製造業36.1%、公務員8.3%、種苗・農業、流通業、その他がそれぞれ2.8%、情報通信業5.6%、学術と複合サービス事業がそれぞれ5.5%となっております。

人事では、犬伏和之教授、近藤悟教授、丸尾達教授の3名が、令和3年3月末で定年退職されました。一方、令和2年10月には、生物生産環境学領域にテニユアトラック助教として濱侃（はま あきら）先生が採用されました。生物環境気象学研究グループへの所属となりますが、その活躍を期待します。

令和2年4月に大学院の改組があり、環境園芸学専攻の下に、園芸科学コース（園芸学科、応用生命化学科、食料資源経済学科）、ランドスケープ学コース（緑地環境学科）の2コースの構成となったことは、昨年お伝えしました。さらに令和3年4月には、教教分離と呼ばれる組織改編があり、大学院園芸学研究院が設置され、教員は5つの講座（植物生命科学講座、園芸環境科学講座、食と緑の健康創成学講座、先端園芸工学講座、ランドスケープ・経済学講座）のいずれかに所属することになりました。園芸学専門分野の深化はもとより、異分野の教員が共同研究を実施するなど、研究力強化のための展開を図ることとしております。なお、園芸学部・園芸学研究科・園芸学研究院のプレゼンスを高めるための一環として、ホームページ（<https://www.h.chiba-u.jp/index.html>）の大幅な改定を行いましたので、ご覧頂ければ幸いです。

新型コロナウイルス感染の収束が見えない中ですが、令和3年度は千葉大学全体で、オンデマンド型のメディア授業、双方向オンライン授業、対面型の授業を組み合わせた講義が行われています。学生の健康を最優先した対応を行いつつ、ワクチンの職域接種なども踏まえ、徐々にwithコロナの教育研究システムへの移行を図っていくことになります。

卒業生の皆様におかれましても、コロナ禍の大変な状況が1年以上続いていると思いますが、感染を回避し健康な生活を送られることを祈念いたします。なお、可能であれば在校生への支援もお願いできれば幸いです。よろしく願いいたします。



夏休み昆虫教室

応用生命化学科の近況

応用生命化学科長 教授 天 知 誠 吾

卒業生の皆様、また保護者の皆様におかれましては、日頃より応用生命化学科の運営にご協力頂き、誠に有り難うございます。

昨年に引き続き、新型コロナウイルスによる感染症拡大は収束にはほど遠く、授業や実習、卒論・修論発表会も大きな影響を受けました。一方、令和3年度からは徐々に対面での授業も増えてきており、7月からは自治体や職域（大学）でのワクチン接種も見通しが立ちはじめ、ようやくうつすらとではありますが、明るい未来が見えてきたかなと感じております。

まず昨年の新1年生（現・2年生）ですが、コロナによる影響を最も受けてしまったのがこの学年でした。応用生命化学科の1年生全てが地元から首都圏への引っ越しを終えたのは、2021年に入ってからのことでした。授業もほとんどがリモートで、サークル活動なども強い制限がかかる中、新しい友人を作るのに大変な苦労をされたことと思います。そんな中、今年度前期の学生実験（化学基礎実験1と2）が、徹底した感染防止策のもと対面で行われ、一人の感染者も出さなかったのは良かったと思います。授業などで拝見する限り、すでにお互いに非常に仲良くなっておられ、教員側の当初の心配は杞憂だったのかも知れないと感じております。これからさらに増える対面授業や実験・実習を通して、さらに信頼関係を育んでいって欲しいと思います。

一方、今年の新1年生ですが、昨年ほどではないにしろ、やはりほとんどの授業がリモートだったため、学科内で友人を作るのに大変苦労をされたようです。昨年に引き続き、週一度の少人数セミナーで諸々のご相談をお伺いしましたが、夏休み前に一度、学科の学生全員が集まれる機会を作る必要があると考え、クラス顧問の宮原講師を中心に1年生合同セミナーを企画いたしました。7月21日の午前に開催された合同セミナーでは、徹底した感染防止策のもと、複数のグループに分かれた学生さん同士が、自己紹介、共通点探しゲーム、他己紹介、グループワーク等を通じて懇親の機会を持ちました。はじめは少し遠慮がちでしたが、10分もすると賑やかな声があちこちから聞こえ、非常に楽しそうに交流されるのを見て、教員一同ホッとしました。

3年生は研究室への配属が決まり、いよいよ本格的に卒業研究に向けて走り始めました。4年生もあと少しで就活や院試が終わり、卒論発表に向けてラストスパートが始まります。



1年生の合同セミナーと集合写真

緑地環境学科の近況

緑地環境学科長 教授 柳 井 重 人

戸定会の皆様方には、常日頃から、当学科の活動に対し、多大なご支援をいただき、感謝しております。

この一年の大きな変化は、新型コロナウイルス感染症の流行であり、それにより授業が様変わりしたことです。前年度開講のほとんどの授業はオンライン形式で実施され、卒業研究発表会等も同様でした。今年度に入ってから、対面形式の授業も多くなり、松戸キャンパスにもようやく学生達が戻りつつあります。それぞれ利点、欠点がありますが、改めて対面の意義や効用を感じているところです。

もう一つの大きな変化は、2020年4月に大学院の改組に伴い発足したランドスケープ学コースの教育研究が本格化したことです。一部授業の英語化、学生の海外留学、演習の充実等に取り組んでいます。2022年3月には、改組後初めての修了生に対して、農学、学術の他に、修士（ランドスケープ学）の学位を授与できるようになります。

コロナ禍による先行きの不透明感や、ランドスケープ学コースへの期待は、学生の進路にも影響を及ぼしました。2020年度の学科卒業生は69名ですが、大学院進学が前年度比較で8.5ポイント増加し30%近くに達しました。一方、公務員が20.4ポイント減少し23.2%になりました。今年度中に学科としてJABEEの技術者教育プログラムの継続審査を受審する予定ですが、改めて学科の教育目標や養成する専門技術者像の明確化などが問われます。

学科の人事異動では、立命館大学理工学部より武田史朗先生を教授として迎えました。また、秋田典子、梅木清、齋藤雪彦の各先生と柳井重人の4名が准教授から教授に昇任しました。加えて、京都芸術大学の加藤友規先生を客員教授として迎えました。なお、昨年度から引き続き、学会、コンクール、社会活動等の場面で、学生、教員の顕著な業績が幾つかみられます。最近では、学部ホームページ等を通じた広報の充実が図られていますので、是非そちらをご覧ください。

最後に、今後とも、変わらぬご支援をお願い申し上げます。



大学院のプロジェクト演習、関係者へのインタビューもオンラインで実施

食料資源経済学科の近況

食料資源経済学科長 教授 栗 原 伸 一

本年度も新型コロナウイルスが猛威を振るっておりますが、幸い本学科ではクラスの人数が少ないため、多くの専門科目で対面授業が復活しております。また、ようやく大学や松戸市でも学生に対するワクチン接種が始まりましたので、徐々にコロナ前のキャンパスに戻るものと期待しております。

さて、人事から報告させていただきます。まず、昨年度末を以って吉田義明准教授が定年退職されました。吉田先生は、1988年に赴任されて以来、32年の永きにわたり、農家女性論を核とした地域労働市場について研究をされ、後年には種苗問題に関する多くの調査業績を残されました。また、釣りやカメラなど多趣味な先生で、学生からも大変慕われておりました。これからも元気で、好きなことを追求していただきたいと思います。

そして今年度は、久しぶりに新しい教員が赴任いたしました。吉田行郷教授です。吉田先生は、農林水産省で農業白書の執筆や国際関連業務を担当された後、農林水産政策研究所で主に麦市場についての研究をされてきました。近年は、農業を通して障害者等の社会参画を実現していく「農福連携」の研究の第一人者として活躍されております(写真)。授業は、農業経営学などを担当いただく予定です。

また、4月には丸山敦史准教授が教授に昇任されました。本学科卒業生でもある丸山先生は、環境評価や開発経済学の分野で数多くの研究業績を上げられ、「わかりやすい授業をしてくれる先生」と学生からも評判です。また、温和で実直な人柄から若手教員からの信頼も厚く、今後は本学科のリーダーとして活躍いただけるものと期待しております。

研究面でも嬉しいニュースがありました。石田貴士助教の研究が、若手としては大きな科学研究費補助金の基盤(B)として採択されました。石田先生の研究は、会場実験などを通して深層心理を探ることで、消費者が正しい情報を入手し、理解できるようにするための方法を明らかにしようというものです。食品廃棄の削減や倫理的消費の促進にも役立つ重要な研究ですので、成功を願っております。

以上、簡単な近況報告でございましたが、皆様方におかれましては、これまで同様、本学科への手厚い支援を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。



農作業に取り組む障害者の皆さん(上:元氣もりもり山森農園、右:みどりの里)



園芸産業創発学プログラムの近況

園芸学科 大 川 克 哉

次世代の園芸産業の発展・展開を担うプロフェッショナル人材の育成を目的に、園芸学科および食料資源経済学科横断型の特別教育プログラムである「園芸産業創発学プログラム」は、今年度で6年目を迎えました。現在、このプログラムを履修しているのは4年生4名（園芸学科4名）、3年生4名（園芸学科）、2年生5名（園芸学科3名、食料資源経済学科2名）です。今年4月には1年生2名（園芸学科2名）が入学してきました。

この園芸産業創発学プログラムでは、高度な生産技術、優れたビジネス感覚およびグローバルな視点を高度な次元でバランスよく修得させることに特に力を入れています。そのために、大学入学後の早期から園芸生産現場や専門分野に触れさせるとともに、実践的で専門性の高い演習やインターンシップなどの特別科目を設けています。1年次では、まず園芸産業の現場を知るといことで、先進的園芸産地視察や流通現場の見学を行っています。この先進地視察を昨年には、千葉（9月）および茨城（11月）県で行い、千葉県農林総合研究センターでは大木氏（園芸昭62年卒）に、株式会社君津とまとガーデンでは山木氏（園芸平25年卒）に、農事組合法人グリーンファームつくばでは羽田氏（農別昭41年卒）にご案内およびご説明していただきました。生産や流通現場等でのインターンシップについては、2年生には2週間、3年生には1ヶ月間、4年生には卒論と兼ねて約6ヶ月間行うことを課しています。昨年度は、これらのインターンシップを大規模施設園芸法人（埼玉県）や植物工場経営法人（千葉県）、花卉法人（東京都）等で行っています。また、現在進行中ですが6ヶ月間のインターンシップを株式会社誠養園の野本氏（園別平12年卒）や有限会社高橋植物園の高橋氏（生物平12年卒）のお世話になり行っているところです。

以上のように、園芸産業創発学プログラムの教育、特に先進地見学やインターンシップ、また関連学部科目の「園芸ビジネス論」等において、このコロナ禍の中でも多くの戸定会会員の皆様にご協力していただきました。この場を借りて厚く御礼を申し上げます。



自作した水耕栽培装置の成果を披露（園芸産業創発学プログラム演習Ⅱ）

環境健康フィールド科学センターの近況

環境健康フィールド科学センター長／副理事（柏の葉キャンパス）

高 垣 美智子

1991年に柏の葉に移転した園芸学部附属農場が、2003年に全学の教育研究機関として改組されてから18年が経過しました。昨年度からの新型コロナウイルスの感染拡大の影響はあるものの、今年度の農場実習は感染防止を徹底して実施されています。また、一年延期となった東京オリンピックの会場周辺を飾る花として、当センターで生産されたペチュニア‘さくらさくら’が立体花壇などに多数使用されました。

2005年に開業した、つくばエクスプレス「柏の葉キャンパス駅」周辺の施設整備は終了し、マンション等住宅の新築が継続しています。柏市等の強い要望による「学園の道」がキャンパス内を開通する計画は遅れ気味ではありますが、2023年度に道が開通する予定は変更されていません。今年度中には、キャンパスの将来計画を確定していく必要があります。

2019年度より開始した履修証明プログラム「多様な農福連携に貢献できる人材育成プログラム」は、入門コースに加えて応用コースを実施しており、食料資源経済学科に着任された吉田行郷先生にもご協力いただき、徐々にネットワークの構築を進めています。

薬用植物に関しては、センター内に設立された「一社法人日本薬用機能性植物推進機構」と連携して、薬用植物・機能性植物の種苗開発・供給を行っています。

農林水産省の植物工場拠点事業では、昨年度末、新しい「人工光型植物工場」が竣工し、イチゴなど新しい作目の栽培も開始されています。国内の他大学や海外の協定校からの学生を対象とした植物工場や施設園芸に関わる研修プログラムも継続して実施しています。

昨年度は、コロナ禍の中、4月に新任の佐々木智丈技術職員を迎えることができました。今後の活躍が期待されます。また、開設以来、センターにおいて園芸別科を中心とした教育、地域の農業やカレッジリンクネットワークなど多くの事業に貢献いただき、2018年度に早期退職された後も、ご指導いただいていた北条雅章先生が7月25日に急逝されました。謹んでご冥福をお祈りします。



履修証明プログラムでの実習風景

令和二年度山形県支部の活動

山形県支部幹事長 鈴木 光 則 (生物平9)

戸定会山形県支部では例年冬季に総会を開催していましたが、令和二年度総会はコロナ禍のために書面評決となり会員が集うことは叶わず寂しい思いをしました。しかしながら、書面評決の葉書の近況報告欄には数多くの会員からコメントが寄せられ、会員同士の繋がりを感じることができました。総会の書面評決結果を会員にお知らせする際にコメントをまとめて返信することで、年に一度の総会に思いを寄せて頂けたと感じています。

人流の制限から活動がままならない令和二年度は小笠原支部長を中心に支部会員の名簿の情報を修正・更新してきました。これまで、支部会における様々な通知を郵便で行っていましたが、令和二年度支部総会の書面評決結果を多くの会員に電子メールで配信を行い、小さな一歩ですがデジタル化を進めたところです。

いまだにコロナ禍で大変な状況が続き、とりわけ大学生生活を謳歌するはずだった現役学生にとっては悔しさを抱えながらの生活を送っていることと思いますので、今できる最大限のことに挑戦して学生生活を楽しんで欲しいと思っています。



山形県特産のさくらんぼ

戸定会福島県支部の活動について

福島県支部長 安 斎 正 典 (園昭47)

福島県支部は会員が130余名、総会は例年県内の温泉地で1泊2日の開催。当日は、まず研修会を実施し、引き続き総会に移行。その後入浴・休憩、楽しい懇親会と続きます。翌日は現地視察研修・昼食後に解散。次年度も元気な姿を見せることを合言葉にしばしの別れ。

しかし、昨年は新型コロナウイルス感染防止対策の関係で中止。昨年の福島県内の感染者数は必ずしも多いほうではなかったものの、安全・安心の観点から中止を決めました。今年も現状からすると開催が厳しい状況にあるかと

思っております。2年続けて活動中止となると、会員から支部活動はもうないものと思われてしまいそう。

ところで、ワクチン接種でどれだけ安心・安全が保障されるのか。来年こそは久しぶりの再会を楽しみたいものです。OB・OGは気持ち若くとも体力だけはごまかせませんので。また会いましょう。

千葉県支部だより

千葉県支部長 奥 倉 努 (生管昭56)

昨年の支部総会(書面決議)において、支部長を仰せつかりました奥倉でございます。コロナ禍のため実開催ができない中での役員交代となり、はなはだ不安ではございますが、皆様方のご支援をいただきながら支部長としての役割を果たしていきたいと考えております。何卒よろしくお願い申し上げます。

さて、千葉県支部では、一昨年の房総半島台風による被災に続き、昨年はコロナ禍ということで、2年連続で実開催ができない状況が続いております。今年も原稿執筆時点で本県は緊急事態宣言中であり、まったく先が見通せない環境です。会員の皆様と情報交換ができないのは大変残念ではありますが、無理は禁物であり、支部総会・研修会の開催については本部や役員の皆様と相談しながら慎重に判断していきたいと思っております。異常事態が続きますが、今後も引き続き支部活動にご支援とご協力をお願い申し上げます。

群馬県支部令和2年度支部総会は紙面開催

群馬県支部 櫛 川 聡 (院後平12)

コロナ禍において、群馬県支部の活動は大きな影響を受けた1年間となりました。おそらくは他の大部分の支部の皆様と同様と思われます。例年通りの懇親会を伴った支部総会は、安全第一の観点から中止として紙面開催としました。しかし、支部総会は年に一度の顔合わせの場、楽しみにしていらっしゃる会員の皆様のお気持ちを考えると何とかそういった場をご提供できないか事務局で相談しました。その結果、令和2年度は「近況報告集」を作成しようということになりました。多くの支部会員の皆様から近況報告をいただきまして、発送いたしました。早く世の中が正常化して、また以前のような懇親会ができる日が来ることを願っております。また、群馬県支部では、若い会員の皆様に参加しやすいような工夫もしています。在校生の皆様は群馬県にご就職されることがあれば、是非お気軽にご参加いただければ幸いです。

令和3年度戸定会役員

(敬称略・順不同 ★前年総会以降新任、◎学部連携委員) 令和3.7.31現在

名誉会長（研究院長）		◎松岡 延浩							
相談役		伊東 正							
監 事		伊能 重憲		福岡 秀実		★西川 嘉輝（造昭52）			
理 事	会 長	◎加藤 一郎							
	副 会 長	◎賀来 宏和		◎齋藤 京子		（学内） ◎三吉 一光			
	常任理事	東京	矢田部正照		末松 茂孝		中島 宏	濱田 豊	◎坂内善次郎
			★外木 秀明（環緑昭60）				住吉 泰男		
		千葉	★奥倉 努		◎金子 文宜		君島 次男	斉藤 威	藤家 梓
			和田 昭通		長嶋 孝志				
		埼玉	時田 勉		奈良井 武		◎前田 敏之	★吉岡 幸夫（園平2）	
			間仁田 勝		村井 千里		吉澤 祥匡		
		神奈川	相場 崇		◎小山 義訓		棚橋 圀成	山田 康博	中野 敏夫
		茨城	内藤 栄		小竹 節		鈴木 栄	◎高栖 敬	長岡 徳樹
			額賀 敏		★渡邊 朝治				
	学内	（庶 務）		梅木 清		◎宇佐見俊行			
		（会 計）		彦坂 晶子		小原 均			
		（会報・名簿）		小林 弘明		霜田 亮祐	浄閑 正史	★宮原 平	
		（広報・HP）		◎古谷 勝則					
	学術振興委員会	（委 員 長）		◎★華岡光正					
	本部推薦	★吉岡 重明（園別昭53）		★萩野 一彦（環緑昭57）		★志賀 聡（園経昭61）			
★岩上 哲也（園経平4）		★篠崎 豊（園昭58）							
支 部	支部長	理 事							
北海道	石村 寛人	木村 篤		橋本 雅之		阿部 克巳		土谷 美紀	
青森	若宮 圭一								
岩手	佐藤 明	山口 貴之							
宮城	篠崎 淳	遠藤 進		近藤 寛		齋藤 健			
秋田	伊藤 博之	大隅 専一		山下 光弘					
山形	小笠原和博	沖田 政明		廣部 公子		加藤 久雄			
福島	安斎 正典	草野 忠次		鈴木 安和		菱沼 勇			
		早福 晃		金成理恵子		★齋藤 勇樹（生物平19）			
茨城	内藤 栄	岡田 勉		岡田 晴雄		田宮 賢		郡司 光一	後藤 詮司
		鶴長 文正		中野 一正		田崎 稔		蓮沼 俊男	細谷 和之
		矢口 達弥		信田 菊江		寺田 誠		渡辺 幸夫	
栃木	野中 英夫	平石 厚夫		田中 敏夫		小池 毅		蓬田 武	
		田邊 千知		寶示戸寿弘					
群馬	白石 俊昌	木村 光一		酒井 宏		根岸 始		村岡 邦三	
		木村 康夫		小倉倫利子					
埼玉	時田 勉	岩崎 桂三		木口 恒夫		野原 宏		星井 静一	細井 民興
		真下 洋二		鈴木 邦彦		長谷川 勲			
千葉	★奥倉 努	秋葉 利雄		石田 和也		甲田 暢男		越川 浩樹	小滝 秀策
		鈴木 孝		上甲震太郎		曾我 浩		富堅 俊彦	南雲 一夫
		福地 信彦		松丸 恒夫		横山 雅亮			
東京	矢田部正照	加藤 正明		木村 栄一		小寺 孝治		清水 政雄	染谷 篤
		馬場 勝		平澤 貴弘		樋渡 達也		前田 誠	町田 誠
		山下 容子		★三好 貴紀（緑環平15）					
神奈川	相場 崇	今関三貴也		鈴木 貴		松本 孝一		小田切克治	安 健夫
新潟	齋藤 健治	倉重 祐二		森山 勉		和田 祥子			
富山	西尾 正								
石川	安田 公平								
福井	北倉 芳忠	小林 恭一							
山梨	植原 宣紘	山本 賢治		今井吉之助		岡 實			
長野	塚原 一幸	北原 千歳		金子 能呼		杉山 利広		高木幸一郎	中山 正男
		西村 清利		萩原 学		三田 毅			
岐阜	成瀬 秀博								
静岡	大谷 徳生	石川 健一		小澤 俊幸		岡村 努		藤浪 正康	澤野 由明
		吉川 公規		佐原 宏康		永田 博之			
愛知	寺西 健	梶野 保光		原 幹博					
三重	堀川 義昭	田中 貞朗							
滋賀		江見 和綽							
京都									
大阪	中西 広樹	仲村 啓		當内 匡		松原 秀也			
兵庫	坂田 正史	大西 潤		原田 充		広脇 淳			
奈良	岩本 和彦								
和歌山	鈴木 惣禄								
鳥取／島根									
岡山	加藤 泉	難波 久一		山田 貞宜		河田 育康			
広島	真宅 成光	立川 真成							
山口	石光 照彦	多々良健司							
徳島	中野 一雄								
香川	安藤 昭則								
愛媛	影浦 章次								
高知	楠瀬 武司	高野 恵子							

理 事	福岡	濱岡 治	井上永太郎	藤井 清昭	宮本信太郎		
	佐賀	久保 和則					
	長崎	浜岸 利昭					
	熊本	五嶋 映司	鶴田 志郎	清住 昇	坂口 信夫		
	大分	志手 博	伊東 壮				
	宮崎	河野 喜幸	押川 裕文	中武 卓博			
	鹿児島	城戸 清志					
	沖縄	花城 良広					
学内理事	秋田 典子	大川 克哉	齋藤 隆徳	園田 雅俊	野田 勝二	百原 新	
◎学部連携委員	天知 誠吾	小川 幸春	齋藤 雪彦	高垣美智子	野村 昌史	八島 未和	
	井川 智子	◎小原 均	坂本 一憲	高橋 輝昌	◎華岡 光正	柳井 重人	
	池邊このみ	加藤 顕	櫻井 清一	竹内 智子	★濱 侃	矢野 佑樹	
	石田 貴士	菊池 真司	佐々 英徳	★武田 史朗	彦坂 晶子	★吉田 行郷	
	磯田 昭弘	木下 剛	椎名 武夫	長 泰行	平井 静	吉田 英生	
	岩崎 寛	◎栗原 伸一	穴戸 雅宏	塚越 覚	◎古谷 勝則	渡辺 均	
	上原 浩一	◎國分 尚	島田 貴士	出口亜由美	本條 毅	渡辺 正巳	
	◎宇佐見俊行	児玉 浩明	霜田 亮祐	土肥 博史	◎松岡 延浩	渡辺 洋一	
	梅木 清	後藤 英司	章 俊華	唐 常源	丸山 敦史		
	江頭祐嘉合	◎小林 達明	淨閑 正史	中村 郁郎	三島 孔明		
	近江 慶光	小林 弘明	相馬亜希子	西田 芳弘	◎三吉 一光		

※戸定会は各都道府県で活動をしております。支部連絡先につきましては、戸定会事務局へお問い合わせください。

令和3年度 戸定会理事会総会報告

本年度も新型コロナウイルス感染拡大防止のため、学内常任理事会のみを対面で行い、常任理事会、戸定会理事会総会は書面による議決とさせていただきます。書面表決書の結果について下記のとおりご報告いたします。

なお、議案の議決は、戸定会会則第15条及び第16条により、ご提出いただいた書面表決書のうち全議案について賛成が3分の2以上となりましたので可決されました。

日 時： 令和3年6月12日
形 態： 書面開催
議 案：

第1号議案	令和2年度戸定会会務・事業報告及び戸定学術振興委員会事業報告	賛成189 反対0 無効0
第2号議案	令和2年度戸定会会計決算報告及び戸定学術振興委員会会計決算報告	賛成189 反対0 無効0
第3号議案	令和2年度戸定会及び戸定学術振興委員会会計監査報告	賛成189 反対0 無効0
第4号議案	役員改選案	賛成189 反対0 無効0
第5号議案	令和3年度戸定会会務・事業計画案及び戸定学術振興委員会事業計画案	賛成189 反対0 無効0
第6号議案	令和3年度戸定会会計予算案	賛成189 反対0 無効0
第7号議案	会則の改正（第12条3号・付則第3条の改正）	賛成189 反対0 無効0

議案につきまして、特筆すべき点をご説明します。

第2号議案：令和2年度決算について（決算参照）

一般会計収入の部では、令和2年度の総会で承認された学術振興委員会と戸定会との会計の統一化をおこない、学術振興委員会の財産2,354,051円を戸定会一般会計の収入「学術振興会計受入」として受け入れました。（学術事業会計52,838円＋運営資金会計2,301,213円）支出の部では、学術振興事業費として、100,000円の予算を計上しましたが、SEEDS基金で処理されたため支出はありません。支部活動支援費、戸定祭参加費、会議費は、新型コロナウイルス蔓延により、支部総会などが中止されたため支出が大幅に削減されました。

第4号議案：令和3年度役員改選（役員一覧参照）

田中史郎監事が退任され、西川嘉輝氏（造園52）が委嘱されました。

本部機能強化を図るため、特命事項を担当する本部推薦理事を戸定会本部近隣支部より選任されました。

第5号議案：令和3年度事業計画 名簿作成の検討について

戸定会名簿（卒業生名簿）については、園芸学部創立100周年を契機とした発刊（2012年1月末）以来、10年発刊されてお

りません。事務局としては、今後の戸定会の継続的な運営にあたっては、新しい名簿の発行が不可欠との判断に至り、戸定会理事会総会において、「名簿の作成については、戸定会に設置された学部連携委員会に諮った上で、その可否を決し、その結論を改めて、常任理事会において書面にて審議する」旨の議決がなされました。

この議決に基づき、6月23日、本部役員及び近隣支部の委員で構成される学部連携委員会にお諮りしたところ、支部の立場でも作成すべきのご意見を頂戴し、学部側からも賛同を得られましたので、再度、臨時常任理事会を書面にて開催しました。ご提出いただいた書面表決書の結果、賛成30、反対0、無効0、賛成が3分の2以上となり戸定会名簿作成については可決されましたので、ご報告いたします。

また、同委員会におきましては、戸定会名簿の作成並びにこの基礎となる卒業生情報の管理に関して、これまでの委託会社である「株式会社廣済堂」から、千葉大学の他学部等での同窓会名簿の制作実績を有する「株式会社サラト」に変更することについてもご了承いただきました。

順調にいきますと、令和4年3月頃名簿データの調査ハガキを全会員の皆様にお送りいたしますので、よろしく願いいたします。戸定会名簿は令和4年の12月以降完成予定です。

第6号議案：令和3年度戸定会会計予算（予算参照）

一般会計、支出の部の会議費は対面での会議が減少する見込みのため減額としました。予備費は会計ソフトを導入した場合と名簿作成などを勘案して増額しました。

第7号議案：会則の改正

新設された本部推薦理事に対して、戸定会会則第12条3号の「ただし」以降追記しました。（以下第12条3号抜粋）

第12条 役員の職務は次のとおりとする。

3. 理事は会務を審議する。ただし、第10条4号により選任された理事は、本会の会務や事業計画の推進に関して、会長の指示する特命事項の検討や執行を合わせて行う。

上記に伴い、付則 第3条 本会則は、2021年（令和3年）6月12日より施行する。と改正しました。

書面開催による常任理事会、理事会総会にご協力をいただきありがとうございました。

会 員 訃 報

前号発行後、ご逝去の報告をいただきました。
謹んで哀悼の意を表し、ご冥福をお祈り申し上げます。(敬称略：令和3年7月末現在)

〈旧職員〉

旧職員 荒木 肇義
旧職員 桑原 勉
旧職員 吉田 昌之

〈園芸学科〉

園昭14 中山 至大
園昭18 粕壁隆二郎
園昭19 狩谷 敏夫
園昭20 田中 孝道
園昭20 深沢 泰平
園昭22 朝比奈 脩
園昭22 足立 元三
園昭22 鈴木 甫治
園昭23 中川 秀夫
園昭23 林 和夫
園昭23 淵上 和彦
園昭23 松原 清
園昭23 宮嶋 敬夫
園昭26 内田 波音
園昭28 加藤 雅稔

園昭29 戸塚 隆是
園昭30 岩佐 昌子
園昭30 松浦 稔実
園昭30 柳 久
園昭31 中田 隆人
園昭33 伊藤 敏治
園昭34 浅見 明
園昭34 原田 繁
園昭36 茂木 正道
園昭38 岡野 剛健
園昭38 小松 徹夫
園昭38 関野 新也
園昭40 宮田 増美
園昭40 山崎 俊朗
園昭42 橋本 正義
園昭46 渡辺 恒夫
園昭48 仲倉 裕幸
園昭52 中下 雅敏
園昭53 菅野 和彦
園昭63 舩田 幸子

〈農芸化学科〉

化昭19 鈴木 淳
化昭19 浜田 靖
化昭22 広瀬 義成
化昭23 小林 俊夫
化昭25 岩瀬 節三
化昭26 工藤 忠
化昭31 柳沼 勲
化昭37 奥田 馨
化昭37 森川 仁
化昭39 瀬戸 貞雄
化昭43 小田 雅庸
化昭47 鈴木 達志
化昭49 大山 敏雄
化昭51 大野 信子

〈造園学科〉

造昭26 八尋 鴻介
造昭28 俵 浩三
造昭31 會田 雄亮
造昭31 板倉 傳明

造昭33 川谷内映一

造昭42 門脇 穰

〈総合農学科〉

総農昭30 向山 玉雄
総農昭32 市瀬 春夫
総農昭33 山田 恵一
総農昭36 横山 輝雄
総農昭38 山本 勝利
総農昭41 萩谷 俊一
総農昭42 本田 保夫

〈農業生産管理学科〉

生管昭51 根崎 賢治
生管昭53 河合 祐里

〈農業別科〉

農別昭16 岩瀬 栄一
農別昭17 大久保正義
農別昭18 矢口半左衛門
農別昭22 秋山 典夫
農別昭22 中田 蕃雄
農別昭28 佐藤 仁士

農別昭29 田中一二三

農別昭30 秋葉 聡明
農別昭30 桜井謙次郎
農別昭32 眞輪治武以文
農別昭33 蛭田 和衛
農別昭37 前野 憲一
農別昭39 金井 一二
農別昭42 飯ヶ谷喜久夫
農別昭43 谷貝 幹夫
農別昭44 富沢 益美
農別昭49 鈴木 篤

〈園芸別科〉

園別昭53 羽野 直稔
園別昭22 長谷川 想

〈特別加入者〉

特造昭49 加勢 栄寿

〈大学院〉

化専昭48 山田 良三

吉田昌之先生を偲んで

食料資源経済学科教授 栗 原 伸 一

1982年から18年間にわたり本学部で教鞭をとられた吉田昌之先生が、2020年3月20日に白血病のため神戸市内の病院で逝去されました。享年75歳でした。

吉田先生は1968年に京都大学を卒業後、帯広畜産大学と京都大学の助手を経て、本学部で講師として赴任されました。農産物の需給に関する計量分析や産業連関分析（経済波及効果の計測）を主に専門とされ、2002年には米の生産に関する研究で学会賞（地域農林経済学会誌賞）を受賞されるなど、当該分野においては学術的に高い評価を得られました。授業は統計学や計量経済学などを担当し、現在重視されているデータ・サイエンティストの

育成に取り組まれた先駆けでした。

先生は大変温和で社交的な方であり、下戸ではありませんでしたが、お茶を飲みながら学生と楽しくおしゃべりをする姿がとても印象的でした。また、ドングリやタマムシの羽根を収集するなど、子供っぽいところもあり、私を含めた若手教員からも大変慕われていました。2000年に京都大学に教授として移られた後も、日本農業経済学会の副会長を務められるなど我が国の農業経済学の発展に尽力され、京都大学では名誉教授を授与されました。先生のご冥福をお祈りいたします。

北条雅章先生を偲んで

(公財) 園芸植物育種研究所 理事長 丸 尾 達 (園昭54)

北条雅章先生が、令和2年7月25日にご逝去されました。前日24日は大変暑い日でしたが、先生は地域の除草作業にお元気に参加された後、帰宅後突然体調を崩され、脳内出血のため、翌25日未明に66歳の若さでご逝去されました。

先生は、昭和51年3月園芸学科を卒業後、当時の藤井健夫教授の強い推薦もあり、園芸別科専任助手として採用されました。前年に農業別科を拡充改組して、園芸別科が設置され、専任教員の定員が認められたことによるものでした。

以降、平成29年3月に「地域貢献のため」と、定年を前にご退職されるまで41年間にわたり、まさに園芸別科の

顔として園芸別科・園芸学部・環境健康フィールド科学センターの教育・研究のため、講義や実習に実に精力的に取り組まれました。トレードマークは愛用のオレンジのジャンパーでした。後年は数々の家庭菜園指南書を出版される等、蔬菜園芸学の底辺拡充にも多大な貢献をされました。

コロナ禍のため、多くの方々が先生と十分なお別れができませんでした。私も今でも信じられない気持ちです。落ち着きましたら北条先生の多くの門下生とご一緒に、今一度先生を偲びたいと思っています。先生のご冥福を心からお祈りいたします。

丸田頼一先生を偲んで

緑地環境学科教授 柳 井 重 人 (環緑昭63)

丸田頼一先生は、令和2年6月21日に82歳で逝去されました。先生は、1977年に母校である千葉大学園芸学部で助教授として着任され、2003年に教授として退官されるまでおよそ四半世紀の長きにわたり教鞭をとられました。この期間を中心に、先生は、造園学、都市計画学、気象学等の学際的な領域を統合しつつ「都市における緑地のヒートアイランド現象に関する計画学的研究」を追究されました。加えて、全国の都市・地域計画や、公園

緑地などの調査・計画・設計を実践され、2017年には私たちの分野での最高の栄誉である「みどりの学術賞」を受賞されました。また、生前のご功績に対し従四位・瑞宝小綬章を追贈されています。普段の先生はお酒が大好きで、学生と共によく一緒にしました。研究から、政治、経済、スポーツなど、他愛もない話を先生とする楽しい時間でした。今は、先生のご指導に深く感謝し、静かに手を合わせ、心からのご冥福をお祈りしたいと思います。

戸定会員の皆様

北条キヨ

私は、昨年戸定会報誌に、7月25日の逝去を紹介されました、北条雅章の妻です。コロナ禍の中、夫の告別式は県外の方の参列をご辞退申し上げるという苦渋の決断をしなければならませんでした。多くの卒業生や職員の皆様から香料や弔電をいただきました。それにもかかわらず、個別に御礼をお届けすることが叶わず、心苦しく感じておりました。

このたび戸定会事務局のご理解により、戸定会会報誌を通して、御礼の言葉と、故人北条雅章の生き様を紹介する機会をいただきましたことに深く感謝申し上げます。夫は退職後、茨城県農大、日本農業経営大学校の非常勤講師をしておりました。地元にも益子の道の駅附属農園の技術指導をしながら、自宅に育苗ハウスを設け、農家へ野菜苗作りの講習等をしておりました。また、地元営農集団（40戸）の会計事務も担当しておりました。

7月24日の午前中、夫が「熱中症」を訴えて玄関へ倒れ込んで来ました。私の差し出したコップ1杯のアクエリアスを「うまい」と言って飲み干し、それがこの世での最後の言葉となりました。それから夫は12時間後に静かに天国へと旅立ちました。その顔はとても安らかで、すべてを悟りきったように神々しく輝いて見えました。

私は、昨年の9月から夫の後任として自治会長に就任しました。私は夫が残してくれた農業機械や資材を益子農園に無償で提供しながら、益子町の地域おこし協力隊の農業部門の方々を応援しています。私自身も夫の「野菜の栽培本」を参考にしながら、園芸療法を実践して、初めて栽培を試みたトマトが、見事に成育してくれました。夫の仏前に毎日収穫の状況を報告しております。

最後になりましたが、在職中には大学関係者の皆様、卒業生の皆様には大変お世話になりました。



2021.7.3 撮影 桃太郎トマト、1段目です。

新しい戸定会名簿の発行について

戸定会副会長 賀来 宏和（造昭52）

千葉大学園芸学部は今年で創立112年目を迎え、大学院を含め、その卒業生・修了生は2万人に至っています。戸定会名簿については、園芸学部創立100周年記念事業の折以来、10年余にわたって発行を致しておりませんでした。

戸定会の諸活動を活性化するためには、会員の交流や情報の発信などが不可欠であり、この度、園芸学部とも連携しつつ、新しい会員名簿を発行することと致しました。

会員名簿の発行については、総会にて審議すべき事項ですが、今年度は諸般の情勢により、常任理事会並びに総会ともに書面表決を行っております。このため、総会の書面表決にて、「名簿発行の是非について、近隣支部の選出委員からなる学部連携委員会での審議を経て、再度、常任理事会の書面表決に諮って、決定する」との議決をいただきました。これに従い、学部連携委員会に諮りましたところ、是非発行すべきであるとの結論を頂戴し、これを受ける形で臨時常任理事会の書面表決において、名簿を発行することが決定致しました。臨時常任理事会の書面表決においては、個人情報取り扱いについての留意点のほか、是非とも発行してほしい等のご意見を頂戴しております。これらのご意見も踏まえつつ、名簿発行に関する様々な検討を行うため、「名簿作成委員会」を戸定会会長等の役員、園芸学部関係者により構成し進めていきます。

名簿の発行については、千葉大学の医学部、薬学部などをはじめ千葉県内はもとより全国の大学、高等学校の同窓会名簿作成の実績がある株式会社サラトと協議をかさね、

名簿の作成については、原則として、戸定会からの経費の支出はなく、同社からの会員の皆様への名簿の販売、賛助金の募集、さらには広告などを頂戴することによって、制作経費に充てることとし、同社を名簿作成の事業者とすることと致しました。

名簿の作成については、会員の連絡先などの最新情報が不可欠であり、今後、数次にわたり、同社から調査の往復葉書を会員の皆様に送付させていただきます。内容をご確認の上、必要事項にご記載の上、必ずご投函ください。

上記のように、名簿の販売、賛助金の募集（名簿を進呈させていただきます）、広告のお願いにつきましては、今後、株式会社サラトからご連絡が入ろうかと思っておりますので、よろしく協力のほどお願い申し上げます。

会員の皆様の情報の収集・訂正とともに、名簿販売等の見通しをたてつつ、同社のこれまでの実績を勘案しますと、最短で令和4（2022）年の12月以降に新名簿として発行が完了する予定です。



卒業生だより



POST - CARD



川岸 寛明 (応用生命化学科 令和3年3月卒)

卒業後、4月に㈱富士通エフサスへSEとして入社しました。現在はクラウドやネットワークといった領域の業務に携わっております。COVID-19の影響で働き方も変化しており難しさを感じる場面もありますが、在学中のオンライン経験のおかげで何とかやっています。社会のデジタル化を支える一助となれるよう日々精進してまいります。



鷺 陽香 (応用生命化学科 平成30年3月卒)

生物化学研究室を修了後、体外診断用医薬品メーカーの富士レビオ株式会社に入社し2年目になります。これまで新型コロナウイルスの抗原検査薬の改良や、新型コロナウイルスとインフルエンザを全自動で同時に検査できる試薬の開発等に携わってきました。研究室での学びを活かせる場面もあり、感謝しております。今後も病気の早期発見に貢献できるよう精進します。



横田 隆一郎 (食料資源経済学科 平成30年3月卒)

家業の和牛肥育農家を継ぎ4年目となります。農業の仕事は幅広く日々学ぶことが多いですが、それだけやりがいも感じています。千葉大学で学んだ農業を、実際の現場から見つめ直すと、また新たな視点が変わり非常に面白いと感じております。コロナ禍で厳しい状況が続いていますが、そのような中でも自分ができることを考え日々精進しています。



倉富 里沙 (食料資源経済学科 平成30年3月卒)

電気通信事業者に入社して4年目、現在は通信機器の開発に携わっております。大学で学んだ分野とは全く異なりますが、「通信で日本の農業の未来を作る！」という目標を将来達成するために、日々知識の習得に励んでおります。プライベートでは、コロナ禍を寧ろチャンスと捉え、パン作りや山登りなど新たな趣味にチャレンジしています。



丸木 英明 (緑地・環境学科 平成12年3月卒)

全国をフィールドに地域づくりを支援する仕事をしています。過疎地域の住民自治や温泉地・景勝地の観光振興、林業の担い手確保、都市農地の新たな価値創出など、多様化する地域課題に日々向き合っています。この原動力は、大学で仲間と学び共に過ごした経験が土台になっています。時々、戸定が丘の空気を思い出し「元気」を補充しています。



馬淵 大樹 (緑地環境学科 平成26年3月卒)

学部修士とランドスケープデザインを学んだ後、更なる学びと実務経験を求めオランダに来ました。4年制夜間大学院Academy of Architectureで設計理論を深める傍ら、アムステルダム市環境設計部署にて公共空間デザインに携わる社会人学生をしています。オランダ人の上手な私生活と仕事の両立も見習いつつ、一人前の設計者を目標にデザインに勤しんでいきたいです。



三上 峻 (園芸学科 平成30年3月卒)

蔬菜園芸学研究室にて修士課程を修了し、現在は農林水産省北海道農政事務所で畑作物を担当しております。蔬菜研では「論理的思考と熱意を持って、まずはやってみる」ということを学びました(暑苦しいですね)。行政の仕事は、関係先との信頼関係を築き、率直な意見を聞き、一体となって解決策を考えていくという点に面白さを感じます。今後も人の縁を大切に、農政に尽力していければと思います。



佐々木 杏菜 (園芸学科 平成30年3月卒)

在学中は蔬菜研で人工光型植物工場に関する研究を行っていました。卒業後の現在は製粉メーカーにて、主に天ぷら粉や唐揚げ粉の商品開発業務を担当しています。また、新規参入した人工光型植物工場事業にも携わり、蔬菜研で実際に現場を見て学んできた経験が今に活かされています。



浩気寮について

園芸学科4年 白井勇翔

浩気寮の現状

現在、浩気寮では男子17人、女子7人、その中で留学生は男子5人、女子3人という構成となっております。

昔は寮母さんがいて、家事を手伝ってくれていたそうですが、いまでは学生の自治となっており洗濯、料理、掃除などはすべてそれぞれの学生が行っております。寮の中でも役割が決められており、寮生を代表する寮長、生活用品などの備品購入や掃除の割り当てを担当する衛生厚生委員、寮のイベントを担当する文化交流委員、寮費を徴収する会計委員など役割分担されており、半期に一度メンバーが更新されるという形となっております。

寮での日常

一人一部屋割り当てられており、冷蔵庫、机、ベッド、エアコンは備え付けのものがありますが、テレビやカーペットなどは自分で購入する必要があります。キッチンやトイレ、洗面所、風呂は共有で掃除当番というものが決められています。共有物には筋トレ器具もあり、共有スペースで筋トレをしている人もいます。

寮でのイベント

寮でのイベントは主に文化交流委員が計画します。今は新型コロナウイルスの影響でイベントは軒並み中止なのですが、コロナ以前のイベントを紹介させていただきます。

4月には新寮生歓迎会があり、先輩寮生の部屋を個別に回って、寮や大学の話を聞く機会となっております。また不定期にスポーツ大会もあり、バレー、サッカーなどのスポーツを行い、見事優勝した方は表彰されることができます。3月には卒寮式があり卒寮生に花や表彰状を渡します。

「イベントを通じて寮生の仲が一層深まる」と先輩寮生は語っていました。

実際にイベントのない現在、寮生同士の関わりはあまりなく、関係が希薄になってしまいました。寮の伝統行事を守るためにもコロナウイルスの収束を願っています。



スポーツ大会



泥まみれ相撲



卒寮式

「緑のテラス」 と 「雨庭」

アカデミック・リンク松戸「緑のテラス」周辺ワーキング委員

木 下 剛

2020年10月23日、雨庭を除くアカデミック・リンク松戸「緑のテラス」が竣工しました。その後、11月27日に雨庭が（写真1、写真2）、12月17日にアカデミック・リンク松戸北側外構の植栽（写真3）がそれぞれ工事を終えました。北側外構には現事務棟（旧図書館松戸分館）前の既存のヤマボウシを延長する形で単幹のヤマボウシを計5本列植したほか車止めを兼ねたスツール（自然石）を設置しました。この石は、保管してあった旧講堂の廃材等を活用したものです。また、芝生と道路の境界部分に砂利込めの浸透側溝を整備しました。

雨庭は今年3月、早速豪雨の洗礼を受けましたが、その浸透・貯留効果を確認することができました（写真4）。また、植えた在来野草たちも春先から次々と花をつけ（写真5）、7月28日現在、ミソハギ、オミナエシ、ワレモコウなどが元気に花を咲かせています。今年に入り、学生たちと雨庭の管理チーム「雨庭組」を組織し、植物のモニタリング調査などを行いながら楽しく管理しています（写真6）。



写真1 工事中の雨庭（2020年11月17日撮影）



写真2 竣工した緑のテラスと雨庭（2020年11月28日撮影）



写真3 植栽工事を終えた北側外構（2020年12月17日撮影）



写真6 雨庭組の活動（2021年5月26日撮影）



写真5 カワラナデシコと新図書館（2021年5月23日撮影）



写真4 大雨・洪水警報下の雨庭（2021年3月13日撮影）

アカデミック・リンク松戸完成記念行事

アカデミック・リンク松戸完成記念行事実行委員会

アカデミック・リンク松戸の完成を記念し、千葉大学園芸学部伝統と図書館の新たな価値を広く紹介することを企図して、その理念「コンテンツとフィールドと学習の近接」にちなんで講演会と展示会を11月に開催します。本来、松戸キャンパスで大々的に開催したいと考えておりましたが、新型コロナウイルス感染症防止のためキャンパスへの学外者の入構が制限されている現状を鑑みまして、講演会はオンライン開催、展示会は同時入館を10人に制限し感染防止に極力配慮して開催することになりました。詳細は、園芸学部ホームページにて案内しますので、ご確認いただき是非ご参加ください。

○アカデミック・リンク松戸完成記念オンライン講演会

松戸分館にはわが国唯一の園芸専門図書館という特徴があり、今回、ランドスケープに配慮した空間という特色が加わりました。千葉大学全体では、アカデミック・リンクの理念のもと、図書館と教育研究のリンクを強力に推進しています。これら多面的要素を持ったアカデミック・リンク松戸の意義について、斯界で活躍されている専門家に掘り下げていただき、今後のあり方について考えます。

・演 題：江戸から近代 園芸の発展

倉重 祐二（新潟県立植物園園長、園専昭62）

・演 題：「つながり」をつくる風景デザイン

大野 暁彦（名古屋市立大学芸術工学部准教授、院園博後平26）

・座談会：園芸とランドスケープと図書館

倉重 祐二・大野 暁彦・田草川みずき（人文科学研究院）

國本 千裕（アカデミック・リンク・センター）

司会：小林 達明（千葉大学附属図書館松戸分館長）

日 時：11月7日（日）13時30分～16時45分（13時から新図書館の映像が流れます）

視聴方法：Zoomウェビナーを用いて配信します。千葉大学園芸学部のホームページ(<https://www.h.chiba-u.jp>)の最新のトピックス・イベント情報トップに、視聴方法が掲載されておりますので、ネットワークにつながったパソコンあるいはスマホからアクセスして視聴してください。Zoomを初めて使う方は、視聴までの設定に少々時間を要しますので、十分な余裕を持って接続準備してください。後日、YouTubeでも公開の予定です。

主 催：千葉大学園芸学部／共催：戸定会

問合せ先：戸定会事務局・佐藤（047-360-3662）

○展示「植物画と園芸—千葉大学附属図書館松戸分館のコレクションから」

松戸分館では、岩佐亮二名誉教授コレクションをはじめとした古図書を所蔵しておりますが、園芸専門学校時代28年にわたって図画を指導された田中寅三画伯と学生が描いた植物画がたくさん残されております。普段貴重書庫に秘蔵されているこれらの資料と開架資料を合わせて、近世から近代に至るわが国の園芸の変遷と本校における教育を、植物画を軸として一覧できる展示を行います。コロナ下で入館制限をさせていただきますが、新装された図書館と緑のテラスの観覧と併せて、多くの皆様にご予約の上ご来館いただきますことをお待ち申し上げます。

日 時：11月1日（月）～14日（日）10時～16時

うち3日（水・文化の日）・6日（土）・7日（日）・13日（土）・14日（日）のみ一般公開

会 場：図書館松戸分館2階アクティブラーニング・スペース

定 員：同時入館を10人に制限させていただきます。事前に下記ホームページで該当日ご予約の上、ご来館ください。

ご予約先URL：<https://airrsv.net/alcmatsudo/calender>

主 催：千葉大学附属図書館松戸分館

問合せ先：千葉大学附属図書館松戸分館・村上（047-308-8716）／戸定会事務局・佐藤（047-360-3662）

主な出展予定絵画・図書：

*田中寅三コレクション（ツツジ・サクラ・ボタン等の植物画・学生の植物画含む、「園芸学校講堂」、湯浅四郎「千葉県立高等園芸学校平面図」、森欽之助「高等園芸学校鳥瞰図」、李時珍「本草綱目」、宮内庁「椿花図譜」、水野元勝「花壇綱目」、伊藤伊兵衛三之丞「錦繡枕」、伊藤伊兵衛政武「古歌偃楓集」、橘保國「絵本野草山草」、C.P. Thunbergほか「Thunberg's drawing of Japanese plants」、岩崎灌園「本草図譜」、P.J. Redoute「Les Roses」、水野忠暁「草木錦葉集」、伊藤圭介「泰西本草名疏」、長生舎主人「松葉蘭譜」、北斎「白百合」、広重「月夜桃と燕」、松平定朝「花菖培養録草稿」、成田屋留次郎「三都一朝」、横浜植木「園芸植物図譜」、日本園芸会雑誌、植物研究雑誌 など



田中寅三「白鷹」

フランス式庭園のチャボヒバと ユリノキが大きくなりすぎています

植栽管理計画ワーキンググループ **小林 達明**

園芸学部のフランス式庭園は本場の沈床庭園のミニチュアで、周囲の樹木も全体景観に調和するよう従来小ぶりに管理されてきました。そのような樹木が大きくなっていきます。例えば、旧シュートに不定芽を形成しない特性から強剪定できないチャボヒバを、園芸学部では、新シュートをイチョウ型に手つまみする方法で樹冠を透かすというとても手のかかる作業を毎年行うことで維持してきました。かつては、技術職員が一冬毎日のように手入れしていたものです。しかし、農場が平成3年に柏市に移転し、技術職員も全員異動することになり、学生実習はあるものの一部の手入れしかできないため、毎年の管理作業ができておりません。そのため、じわじわ大きくなって、もはや「チャボ」ではなく、樹形が崩れた個体が出てきて、庭園景観全体にも悪影響を及ぼすようになっていきます。

「園芸学校のこぶユリノキ」として有名だった列植も、かつては学生全員が木登りして主枝の一定位置で全



隙間なく、大きくなりすぎて、「トサカ」が立ってきたチャボヒバ



樹冠が茂りすぎて図書館4階閲覧回廊からの眺望を自隠しているユリノキ

シュートを切除するというのが毎年の秋の風物詩でした。この作業も技術職員の異動などにより維持されなくなり、現在では、法令によって学生の木登り実習自体ができなくなって木が大きくなるにまかされています。図書館が新装され、本来なら、3階閲覧回廊から、ユリノキ越しにフランス式庭園を望む設計になっているのですが、夏季は樹冠が目隠して庭園が見えなくなっています。

これらの課題を解決するために、小林と竹内准教授、木下准教授、近江助教、2年前に庭園管理のための技術職員として新たに採用された山崎技術職員で、検討作業を行っております。近いうちに、フランス式庭園の見た目が一時変わるかもしれませんが、「50年先を見据えた計画」ということで進めておりますので、ご理解とともにご指導ご鞭撻のほどよろしくお願い申し上げます。

戸定会より寄付のお願い

戸定会の重要な活動資源として一口1,000円から寄付金をお願いします。寄付は同封の郵便振込用紙でお願いいたします。

次年度の会報にて、寄付者名簿を掲載させていただきます。

なお、20,000円以上のご寄付をいただいた方には、お礼の品を贈呈します。①～④からお選びください。

- ①環境健康フィールド科学センターで栽培育成したシクラメン（12月上旬発送予定・寒冷地不可※数に限りがあります）
- ②環境健康フィールド科学センターで収穫された果実のジャムと柏の葉産純粋ハチミツ及びパナマ千葉大コーヒーのセット
- ③環境健康フィールド科学センター沼田農場産のリンゴ ふじ（12月上旬以降発送予定・1月末まで発送可※数に限りがあります）
- ④守屋千葉大学名誉教授（横綱審議委員会前委員長）のご実家守屋酒造の純米大吟醸と辛口純米酒のセット（オリジナルラベル）。



シクラメン



ジャム、ハチミツ、コーヒーセット



リンゴ



お酒

編集後記

コロナ禍で不本意な大学生活を送る在校生の生の声が伝えられました。真摯に受け止めたいと思います。また、影響を特に強く受けた業界で奮闘する卒業生の一人からは、力強い寄稿がありホッとしましたところ。試練を受けている卒業生・在校生にエールを送りたいと思います。（小林 弘明）

近代化の過程において自然と都市が分離した結果、生態系から切り離され孤立したウイルスが人間を寄生することで世界的パンデミックが起こったのではないかとコロナ禍の元で感じるがあります。緑豊かな松戸キャンパスはこれからの都市と自然の共生する世界を体現しているのかもしれない。（霜田 亮祐）

今年もコロナ禍のもとでの編集作業となりましたが、目まぐるしく変わる大学の近況をお伝えできる内容に仕上がったと思います。会員の皆様楽しんでいただけることを期待しております。（浄閑 正史）

今年から編集委員に加わりました。ご寄稿いただき、ありがとうございました。学生からの声にもありますが、新型コロナウイルス感染症対応の生活が2年目になり、自粛生活だからそのメリットを活かす柔軟な発想の転換が必要だと感じています。（宮原 平）

表紙写真：千葉大学附属図書館松戸分館と緑のテラスと雨庭（2021年8月 撮影） 撮影者：小林達明

編集兼発行者 千葉大学園芸学部戸定会

〒271-8510 千葉県松戸市松戸648番地 FAX・TEL 047-360-3662

印刷所 株式会社サルト

執務日：月・木・金 留守番電話にはお名前・連絡先のお電話番号をお願いします
E-mail: tojoukai@k6.dion.ne.jp